朗読文

Ⅱ―③

クラス会の幹事を任された佐藤は、久しぶりに中学校時代の友人に電話を入れた。
「はい、原田です」
「夜分遅くすみません。佐藤と申しますが里子さんをお願いします」
「里子は先週から部活の合宿に行ってまして、今日は帰って来ないんです。帰って来るのは水曜日の夜になるんですけど、何か急用ですか？」
「実は私、里子さんの中学校時代のクラスメイトなんですけど、来月クラス会をやることになったので、その連絡なんです」
「そうですか。では水曜日、里子が戻りましたらすぐ連絡させるようにしますね。すみませんが、お名前をもう一度お願いします」
「佐藤弘美と申します」
「佐藤弘美さんですね。お家の方へお電話させればいいですか？」
「はい、お願いします。もし家にいない場合は、携帯電話の方にかけてもらえるように言ってもらえますか？　一応番号を言っておきます。〇九〇―三八一八―八一三〇です」
「〇九〇―三八一八―八一三〇ですね。わかりました」
「よろしくお願いします。失礼します」
数日後、佐藤の家に原田から連絡が入った。
「はい、佐藤です」
「夜分遅くすみません。原田と申しますが、弘美さんいらっしゃいますか？」
「もしもし里子？　久しぶり」
「本当、久しぶりね。この間、連絡くれたそうだけどクラス会やるんだって？」
「そうなの。来月十三日の水曜日に渋谷でやることになったんだけど、里子は出席できる？」
「時間は何時から？」
「七時からなんだけど」
「七時から渋谷か・・・あいにくその日は部活の試合があるの。夕方には終わる予定なんだけど、それから渋谷まで行っても七時には間に合いそうにないな」
「鈴木さんや藤井さんも三十分遅れて来るって言ってるし、途中からでも出席できない？　本田先生もその日来ることになってるし、結構人数も集まりそうなんだ」
「それじゃ、早く終わったら顔を出すようにしようかな。一応、お店の名前と場所を教えてくれる？」
「住所は東京都渋谷区広尾三―七―一、シャトウ・ベールっていうレストランなの。電話番号は〇三―三六五一―一三四一、大通り沿いにあるから場所はすぐにわかると思うわ」
「わかった。ありがとう」
「それじゃ、当日楽しみにしてるね」
佐藤はそう言って電話を切り、まだ出欠のはっきりしない何人かに再度、確認の電話を入れた。